

**企業等の森林づくり活動に対する評価手法の開発
報告書**

平成 20 年 3 月

(社)全国林業改良普及協会

はじめに

地球温暖化防止をはじめとして多面的な機能を有する森林の役割が大きく注目され、その森林の整備・保全を社会全体で支えることの重要性も認識されるようになってきている。

林野庁の調査によれば、森林づくりを行っている国内のボランティア団体は、平成9年の277団体から平成18年には約7倍の1863団体へと急増しており、ここでも、森林への関心の高さが表れている。

一方、環境配慮の浸透、消費者意識の変化などを背景として、企業の社会的責任(CSR)に対する関心も高まり、そうした活動の一環として「森林」についての活動を行う企業も多くなっている。

こうした、一人ひとりが森林を育んでいこう、との意識をさらに醸成していくためには、森づくり活動の環境貢献度等を評価する手法を開発するなどの環境整備を行うことが求められている。

自分たちの取り組んでいる活動を客観的に「評価」することにより、活動はさらに活発になり多くの人々の参加促進につながるものと考えられる。

また、「評価」を知ることによって、より多くの人々が森林づくりに取り組むきっかけとなることもあるだろう。

今回開発された評価手法が活用され、健康的な暮らしと健全な森林が育まれていくことを願ってやまない。

今回の「企業等の森林づくり活動に対する評価手法の開発」(林野庁補助事業)にあたり、各委員・作業部会員ほか関係機関・各位に大変にお世話になりました。とりまとめにあたっては、興梠克久氏(第2章)、木俣知大氏(第3章)、根津基和氏(第3章)に大変にお世話になりました。厚くお礼を申し上げます。

平成20年3月
(社)全国林業改良普及協会

目次

はじめに

「企業等の森林づくり活動に対する評価手法の開発」委員等名簿

第1章 評価手法の開発にあたっての考え方	5
1 目的	
2 開発の方向性	
第2章 定量的評価について（詳細版）	7
1 森林の多面的機能の定量的評価手法の概要	
2 森林の多面的機能の定量的評価の手順	
3 成果品(エクセルファイルキャプチャー画面)	
4 エクセルファイル利用の際の留意点	
第3章 定性的評価について（詳細版）	33
1 定性的評価のレビュー	
2 定性的評価手法の開発に向けた基本的視点	
3 定性的評価手法の基本的枠組み	
4 定性的評価ツール（マネジメント・ツール）の開発	
5 成果品(森づくり活動チェックシート)	
第4章 定量的・定性的評価（簡易版）	87
1 簡易版のねらい	
2 基本構成	
3 成果品（FLASH キャプチャー画面）	
4 活用方法	

「企業等の森林づくり活動に対する評価手法の開発」委員等名簿

・委員

- 池上博身 トヨタ自動車 社会貢献推進室 社会貢献グループ主幹
- 梶谷辰哉 社団法人 国土緑化推進機構 専務理事(9月より)
- 興梠克久 九州大学大学院 農学研究院 森林政策学研究室 助教
- 田川静一 大阪府 環境農林水産部 みどり・都市環境室 森林課長
- 宮林茂幸(座長) 東京農業大学 地域環境科学部 森林政策学研究室 教授
- 森 浩也 ちば里山センター 事務局長
- 安井正美 社団法人 国土緑化推進機構 専務理事(7月まで)
- 横路美喜緒 NPO 法人 埼玉森林サポータークラブ 理事

・作業部会

- 木俣知大 社団法人 国土緑化推進機構 情報・普及部
- 興梠克久 九州大学大学院 農学研究院 森林政策学研究室 助教
- 小林克己 東京農業大学大学院 農学研究科 森林政策学研究室
- 根津基和 LEC東京リーガルマインド大学 総合キャリア学部 講師

(五十音順 敬称略)

第1章 評価手法の開発にあたっての考え方

1 目的

企業の社会的責任（CSR）を意識して活動する企業が増え、その活動の一環として森づくり活動など森林整備・保全に取り組む企業も見られる状況にある。しかし、森づくり活動に参加する企業事例は見られるものの、その取り組みは十分に広がっているとは言えない。

その理由の一つに、株主、従業員、企業ユーザー・消費者、ひいては一般社会にこうした企業の森づくり活動を十分にかつ分かりやすく説明するツールとしての評価手法が整備されていないことがあげられる。

企業等の森づくり活動を正当に評価し、その活動を理解してもらうことが難しく、そのため森づくり活動等へのより一層の取り組みが広がらないと考えられる。

また、NPOなどの各種団体においても、森づくり活動等に対する取り組みを会員や職員、さらには地域社会等へ説明するツールとしての評価手法が整備されていないため、より一層の取り組みへの支持を得る適切な方策を採りにくい状況にある。

そこで、(社)全国林業改良普及協会は、森づくり活動への取り組みをさらに活発化させることを目的として、本事業においてその活動に対する評価手法を開発した。

2 開発の方向性

これまでの同種の研究・取り組み成果等を調査・検討をかさね、「評価」の方法を大きく二つに分けて開発することとした。

「定量的評価」

森づくり活動を行うことによって生まれる数値化できる環境的な貢献度。

例えば、二酸化炭素の吸収量・表面浸食の防止機能・洪水の緩和機能・水資源の貯留・水質の保全ほか。

「定性的評価」

森づくり活動を行うことによって生まれる数値化が難しい社会的・地域的・環境的な貢献度。

例えば、生物多様性保全・多様な資源の活用や提供・内部関係者や幅広い国民を対象とした取り組み・森づくりの活動にかかわる関係者や地域の人々とのコミュニケーションほか。

そして、これらについて詳細版と誰もが使うことができる簡易版とを開発することとした。

●詳細版

「定量的評価」

活動の環境貢献度が、詳細に、客観的・定量的に評価されようとするため、マクロファイル（エクセルファイル）で作成。

都道府県の森づくりコミッション等が、森林簿等の情報を組み込んで使用。

「定性的評価」

森づくり活動のマネジメントツール（自己評価）としての位置付け、チェックシート形式（エクセルファイル）を作成。

●簡易版

活動の動機付けとしての位置づけ、「定量評価」「定性評価」と区分せず一体的に表現し、現在の活動を立体的に評価するためのものとする。

活動の動機付け、詳細版へのステップアップとしての位置づけとする。

フラッシュで作成し、イラスト等を入れ、「効果」を数値だけでなくできるだけ直感的に理解でき、ビジュアルに訴えるようなものとする。

「定量的評価」は、詳細版から項目を減らすなどし、簡単な数値入力等の操作で、利用できるものにする。

「定性的評価」は、チェックシートの簡易版という体裁ではなく、チェック項目の内容について、現状の認識とこれからの発展性のイメージをイラストで表現し、活動のイメージがわくような構成とする。